

説法による弟子のめざめの構造

前 谷 彰(恵紹)

(高野山大学)

§1 教説に用いられる動詞

初期仏教においては、基本的に弟子たちは釈尊の説法によってめざめ、最終的にはアラカン（阿羅漢）となるという考え方であり、その場面を描写するフレーズは『スッタニパータ』をはじめ、種々のニカーヤ文献に見出すことができる。しかし、法を語ったり示したりする行為には、大抵 $\sqrt{\text{vad}}$ 、 $\sqrt{\text{kathaya}}$ 、 $\sqrt{\text{khyā}}$ 、 $\sqrt{\text{bhāṣ}}$ 、 $\sqrt{\text{dṛś}}$ 等の動詞が当てられるように思うが、大体において $\text{pra-}\sqrt{\text{kāś}}$ （以下 prakāśa という名詞形も pK と略す）という動詞が用いられているのである。

$\sqrt{\text{kāś}}$ は第一義に「輝く」「現われる」「見える」等の語義を持ち、これに、「前に」「上に」等の方向性や〈強意〉を示す前接辞が附されることによって、漢訳としては「顕」「開示」「照明」「演説」「開顕」等の意味を持たせている動詞である。

本稿では、本来光照作用を担っている $\sqrt{\text{kāś}}$ という動詞がなぜ説法という法を説示する行為に用いられているのかを検討することによって、説法による弟子たちのめざめの構造について考察したいと考えている。そこで、まずは『スッタニパータ』（散文部分：Sn. pp. 15-16, PTS）のフレーズ（釈尊の説法によって、バラモン・バーラドヴァージャがめざめて行く様

子)を紹介することにしよう。

その時、耕作者のバラモン・バーラドヴァーージャは何も言えずに眼から鱗^{うろこ}の状態となり、世尊のそばに近づき、世尊の足もとにぬかづき、世尊に申し上げた。「すばらしいことです。ゴータマさま。すばらしいことです。ゴータマさま。あたかも倒れた者を起こし、覆われたものを開き、迷っている者に道を示すように、あるいは『眼を有する者たちは色や形を見通すであろう』と言って、暗闇の中で灯火をかかげるように、ゴータマさまは、様々な方法で真理（世界のありよう）を顕^{あきら}かにされました。だから私は、ここでゴータマさまに帰依します。また、教えとピクの集いに帰依します。私はゴータマさまのもつて出家して正式な修行者（ピク）となります。」

そこで、耕作者のバラモン・バーラドヴァーージャは世尊のもつて出家し、正式な修行者となることが認められた。

それからほどなく、このバーラドヴァーージャは、独りで他の人々から遠ざかり、怠ることなく努め励み、熱心に修行していたが、ほどなく、ブラフマチャリヤ（ピクとしての究極の修行＝八正道）一家系を有する家の子たちが、それらを得るために家を出て家なき状態へ赴く一を完成し、世界のありようが顕らかになって、自ずと智慧が生じ、理法（縁起の理法）への眼が働いて、自らめざめ、その境界へと至った。「生（生まれながらのあり方）は尽きた。ブラフマチャリヤは終結した。なすべきことはなし終えた。だから、次の状態（輪廻転生）はないのだ」と確証した。そうして実に、バーラドヴァーージャは、アラカンの一人となった、と。

Atha kho Kasibhāradvājo brāhmaṇo saṃviggo lomahaṭṭhajāto yena
Bhagavā ten' upasaṃkami, upasaṃkamtivā Bhagavato pādesu siraṣā

nipatitvā Bhagavantaṃ etad avoca: “sabhikkantaṃ bho Gotama, abhikkantaṃ bho Gotama: seyyathā pi bho Gotama nikkujjitaṃ vā ukkujjeyya, paṭicchannaṃ vā vivareyya, mūlhasa vā maggaṃ ācikkheyya, andhkāre vā telapajjotaṃ dhāreyya, ‘cakkhumanto rūpāni dakkhinti’ ti, evam evaṃ bhotā Gotamena anekapariyāyena dhammo **pakāsito**. Esāhaṃ bhavantaṃ Gotamaṃ saraṇaṃ gacchāmi dhammañ ca bhikkhusaṃghañ ca, labheyyāhaṃ bho Gotamassa santike pabbajjaṃ, labheyyaṃ upasampadan” ti. Alatta kho Kasibhāradvājo brāhmaṇo Bhagavato santike pabbajjaṃ, alatta upasampadaṃ. Acirūpasampanno kho paṇāyasmā Bhāradvājo eko vūpakaṭṭho appamatto ātāpi pahitatto viharanto nacirass’ eva, yass’ atthāyakulaputtā samma-d-eva agārasmā anagāriyaṃ pabbajanti, tad anuttaraṃ brahmacariyapariyosānaṃ diṭṭhe va dhamme sayāṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja vihāsi, ‘khiṇā jāti, vusitaṃ brahmacariyaṃ, kataṃ karaṇiyaṃ, nāparaṃ itthattāyā’ ti abbhaññāsi. Aññantaro ca kho paṇāyasmā Bhāradvājo arahataṃ ahoṣi ti

この定型フレーズは様々なニカーヤ文献やヴィナヤ文献に散見し得るが、ここで問題となるのが、このフレーズにおいて、dhamma (dharma) と結合している pakāsito という語についてである。この語は、サンスクリット語形 pra-√kāś (以下 pK) の過去分詞形で、ここでは一応「顕らかにされた」と訳しておいたが、pK は基本的に「強く（前に）輝く」と「強く（前を）みる」と「強く（前に）語る」の三様の意味を持ち、一義的に決定することのできない複雑な語義を有する厄介な語と言わざるを得ない。

仏教典籍を見る限りにおいて、pK が「光照作用」を担っている用例は、説法以外の場で用いられる場合に見出され、『スッタニパータ』では以下

の一例にとどまっている (*Sn.* vs. 1032, 1033, p. 197, PTS.)。

若き人アジタは訊ねた。「いったい何によって世界は覆われているのですか。いったい何によって輝かないのですか。いったい何が世界を汚しているというのですか。いったい何が世界の大きいなる恐怖なのですか。」

“Kena-ssu nivuto loko,

icc-āyasmā Ajito

kena-ssu na-**ppakāsati**,

ki 'ssābhilepanaṃ brūsi, kiṃ su tassa mahabbhayaṃ.” (vs. 1032)

世尊は答えた。「アジタよ、世界は無明によって覆われている。世界は物惜しみとでたらめさで輝かないのだ。貪りに汚染され、苦しみがこの（世界の）大きいなる恐怖なのだ。」

“Avijjāya nivuto loko,

Ajitā ti Bhagavā

Vevicchā pamādā na-**ppakāsati**,

jappābhilepanaṃ brūmi, dukkham assamahabbhayaṃ.”

ここにおける pK は、『パラマツタジョーティカー』によってみても、その語義については釈されていないが、筆者は一応「輝く」という訳語を与えておいた。ただ、この vs. 1032 は Franke によって『マハーバーラタ』の偈とのパラレル関係が指摘されており、それは次のようである。⁽¹⁾

この世はいったい何によって覆われ、何によって輝かないのか。

いったい何によって陽の光が捨て去られ、いったい何によって天に赴かないのか。

Kenāyam āvṛto lokaḥ kena vā na **prakāśate** /

Kena tyajati mitrāṇi kena svargaṃ na gacchati. //

このように、確かに *MBh* の a-b 句と上に見た *Sn* の a-b 句は対応しているが、*MBh* における pK は mitra (太陽) と svarga (天) との関係から考えて、明らかに自然界における物理的な光照作用としての「輝き」を意味していると理解してよいであろう。これに対し、*Sn* の場合は「世界が輝かないのは〈無明〉に起因している」という仏教的な意味づけがなされていることに気づく。但し、ここにおける pK は *MBh* の用例とは違って、明らかに物理的光照作用とは言えないまでも、「Aは輝いて見える」というような比喩的表現を含んでいることだけは確かである。そこで、より推し進めて pK の意味概念を考えるためにも、今度はバラモン教における pK の語義について探っていくことにしよう。

§2 バラモン教聖典にみる pK の用例

バラモン教聖典において、pK の語義を探る操作に入る前に、今は以下に引用する『リグ・ヴェーダ』の「アグニ讃歌」に登場する cakṣaṇi という語について少し考えてみることにする。⁽²⁾

sá no vibhāvā cakshāṇir ná vástor agnir vandāru védyas cāno dhāt
/

viṣvāyur yó amṛito mārtyeshūsharbhūd bhūd átithir jātāvedāḥ //

この cakshāṇi (cakṣaṇi) という男性名詞は、「光照体」を意味し、Sāyaṇa の註によれば prakāśa と同義であるという。⁽³⁾ 語形からすると、cakṣaṇi は $\sqrt{\text{cakṣ}}$ の派生語と考えられ、 $\sqrt{\text{cakṣ}}$ はもともと $\sqrt{\text{kāś}}$ の重字語形と見なされおり、⁽⁴⁾ Pāṇini によれば Ārdhadhātuka-affix が適応される時、 $\sqrt{\text{cakṣ}}$ すなわち $\sqrt{\text{kāś}}$ は $\sqrt{\text{khyā}}$ によって代用されるという。⁽⁵⁾ $\sqrt{\text{khyā}}$ は

「光」を意味すると同時に、受動態で「言われる」「知られる」となり、使役形で「宣言する」「知らせる」「示す」等を意味する語である。

√kāś の語義は基本的に「輝く」「現われる」「見る」「告げる」等であるが、この重字語形である√cakṣ が「輝く」という意味で用いられることはない。ところが、√cakṣ に後接辞 us が附された中性名詞 cakṣus は通常「眼」を意味する語であるが、「輝き」や「光」という語義に加え、「太陽」を意味する場合がある。⁽⁶⁾このように、√kāś と√cakṣ と√khyā は語法及び語義において、非常に複雑な関係にあることが分かる。後に見るウパニシャッド文献では√kāś に前接辞 pra が附された prakāśa という中性名詞が、「光」を意味する語として重要な位置を占めることになるが、『リグ・ヴェーダ』「最終章」のインドラ讃歌に一度だけ見出すことができるので、以下に紹介しておくことにする。

ここに太陽あり。こは常にいみじきものなりき。ここに**明澄**あり。広き空界あり。われら両神にてヴリトラ（悪魔）を殺さん。ソーマよ、いで来たれ。みずから供物なる汝を、われら供物もて祭らんと欲す。
Idám svár íd āsa vāmám ayám **prakāśa** urv antáriksham /
hánāva vṛtrám niréhi soma havísh ṭvā sántam havíshā yajāma //
(RV. 10-124-6)

ここで辻直四郎は prakāśa を「明澄」と訳しているが、他に用例を見ない辻独自の訳語である。Geltner (【1951】 Teile. 3, 354) は 'das Sonnenlicht' 「日光」と訳しているから、この語に太陽崇拜の観念を読み取った可能性が考えられる。

prakāśa という語は通常「光明」「照明」「顕示」等と訳され、後の思想、特にインド諸哲学派の思想展開にきわめて重要な地位を獲得して行くが、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』(Chāndogya-Upaniṣad) では、サテ

— 6 — 説法による弟子のめざめの構造 (前谷 彰)

イア・カーマという正直者の小年に纏わる寓話の1シーン中に prakāśavat
という語が次のように登場する。⁽⁷⁾

「そして、ブラフマンの足についての話があるんだよ」と。〔牡牛は言った〕「どうか私に話して下さい、尊いお方」と〔サティア・カーマは言った〕〔牡牛は〕彼のために語った。「東の方が一部分 (kalā?), 西の方が一部分, 南の方が一部分, 北の方が一部分, 親愛なる者 (少年) よ, この四方の部分を担うブラフマンの足が, prakāśavat (光輝を有するもの) と言うんだよ」

brahmaṇaś ca te pādam bravāṇīti, bravītu me, bhagavān, iti, tasmai hovāca: prāci dik kalā, prācīti dik kalā, dakṣiṇā dik kalodici dik kalaiṣa vai, saumya, catuṣ-kalaḥ pādo brahmaṇaḥ **prakāśavān** nāma (ChU. 4-5-2)

まさにこうして知る者が、四方の部分を担うブラフマンの足が光輝を有するものとして心に念じれば、この世において光輝を有するものとなり、光輝を有するものは諸世間を勝ちとり、まさにこうして知る者は、四方の部分を担うブラフマンの足が光輝を有するものとして、心に念ずるのである。

sa ya etam evaṃ vidvāṃs catuṣ-kalaṃ pādaṃ brahmaṇaḥ **prakāśavān** ity upāste **prakāśavān** asmiṃl loke bha vati, **prakāśavato** ha lokān jayati, ya etam evaṃ vidvāṃś catuṣ-kalaṃ pādam brahmaṇaḥ **prakāśavān** ity upāste (ChU. 4-5-3)

このように、ブラフマンと pK が結合しているが、問題はこの物語の内容が果たしてブラフマン・アートマンの観念に関わる解脱境界を描写したものであるのかどうかである。

ちなみに、インド諸哲学派において、ヨーガ学派による形而上学的なス

諸説は、基本的にサーンキヤと同じであるが、サーンキヤ学派が最高神の存在を認めない二元論の立場を取るのに対し、ヨーガ学派はそれを創造神としてではなく、一種の純粹精神として認めている。『ヨーガスートラ』(Yogasūtra YS)では基本的に心を統一することによって三昧に到達するための、ある意味での実践論を展開しているが、『ヨーガスートラ』の第二章でいわゆる瞑想の実践が説かれる部分で pK が非常に重要な意義をもって登場するので、以下に紹介することにしよう。⁽⁸⁾

(息のコントロールの) 第四の形態は、外的ならびに内的対象を超えるのである。

bāhyābhyatara-viṣayākṣepi caturthaḥ //(YS. 2-51)

それによって、**光明**を覆っているヴェールが取り除かれる。

tataḥ kṣiyate prakāśāvaraṇam //(YS. 2-52)

ここに示した和訳は湯田豊のものであるが、考察の便宜上、『ヨーガスートラ』第三章も続いて以下に示すことにする。

一定の形態を有しない(身体の)外にある心の作用が、大いなる無身体(mahāvīdeha)と呼ばれる。それによって、**照明**の覆いが消滅する。

bahir akalpitā vṛttir mahāvīdehā tataḥ prakāśāvaraṇakṣayaḥ //(YS. 3-43)

このように、訳語が統一されていない prakāśa とはいったいいかなる〈光〉なのかということになるが、Vyāsa の註によれば、“dhāraṇātaḥ prakāśātmano buddhisattvasya” 云々とあることから、⁽⁹⁾ pK は自身の〈輝き〉であり、それが実体を覚知すると理解し得るであろう。つまり、上に見た YS で説かれる観想の目的は、結局のところ自分自身の prakāśa を覆っている āvaraṇa を取り去ることにあり、そうすることによって、実体を覚知することができるということなのである。ヨーガ学説では、このブツ

デイ (buddhi) が根本原理としてのプラクリティ (prakṛti) 展開の最初の現象形態であり、人間の最高の精神的能力とされているが、自身の prakāśa を覆っている āvaraṇa を取り去らなければブッデイの発露はあり得ないのである。

次に、『サーンキヤ・カーリカー』(Sāṃkhya-Kārikā SaK) における pK の用例を見て行くことにするが、サーンキヤ学派が基本的に二元論の立場を取るのには、精神的原理としてのプルシャ (puruṣa 純粹精神) と物質的原理たるプラクリティという二つの究極的な実体的原理を立てるからである。SaK では、この根本原質の形成要素である三グナ (sattva, rajas, tamas) に関説する場で、以下のように prakāśa という語を見出すことができる。

諸グナは快、不快、絶望を本質とし、照明 (prakāśa)、活動、抑止を目的としている。

また(それらは)互いに優位となり、互いに抛り所となり、生起し、対になり、作用し合っている。

prīty-aprīti-viādātmakāḥ prakāśa-pravṛtti-niyamārthāḥ /
anyo 'nyābhibhavāśraya-janana-mithuna-vṛttayaś ca guṇāḥ // (SaK.
12)

ここでの pK は一応「照明」と訳しておいたが、SaK. 13でも以下のように pK が認められる。

サットヴァは軽快であり、〈照明するもの〉と認められている。そして、ラジャスは刺激あるもので、動(性)である。

タマスは重く、まさに〈覆い〉である。そして、(それらは)灯火のように、(一つの)目的のために活動する。

sattvaṃ laghu prakāśakam iṣṭam upaṣṭambhakaṃ calaṃ ca rajaḥ /
guru varaṇakam eva tamaḥ pradīpac cārthato vṛttiḥ // (SaK. 13)

これについて『マータラヴリッティ』(*Māṭhravṛtti MaV*)によると、pKはlaghutva(軽快性)とともにサットヴァの特性であり、サットヴァが優勢になると、肢支が軽やかになり、感覚が清浄(viśuddha-indriya)となつて、自身の感覚器官を把捉する能力が生じるということである。⁽¹¹⁾なお、*SaK.* 23ではpKなる語は認められないが、『ガウダパーダ・パーシュヤ』(*Gauḍapādabhāṣya GaBh*)によればpKは「知識 jñāna」と「理解 avagama」と「光輝 bhāna」の同義と積されており、*SaK.* 32では次のように説かれる。

器官(karaṇa)は13種である。それは「把捉 āharaṇa」と「保持 dhāraṇa」と「照明 pK」を所作とするものである。

そして、なされるべきものは、把捉されるべきもの、保持されるべきもの、照明されるべきものの10種である。

karaṇaṃ trayodaśa-vidhaṃ tad āharaṇa-dhāraṇa-prakāśa-karam /
kāryaṃ ca tasya daśadhāhāryaṃ dhāryaṃ prakāśyaṃ ca //
(*SaK.* 32)

ここで、*MaV*ではpKが「知覚相 buddhi-lakṣaṇa」であるとし、*GaBh*は「知覚器官 buddhi-indriya」が「照明 pK」をなすと積している。⁽¹²⁾⁽¹³⁾しかし、これ以上認識論の世界に入ることはしないが、以上のことで言い得ることは、*SaK*におけるpKはあくまでも知覚作用と結合し、先に見たYSのように明確な〈光〉という意味概念では捉え難いということである。それは以下に引用する*SaK.* 36がその証左となり得るであろう。⁽¹⁴⁾

これら互いに異なるグナの特異性は、灯火のように、全部プルシャの目的を照らして、知覚の中に引き渡す。

ete pradīpa-kalpāḥ paraspara-vilakṣaṇā guṇa-viśeṣāḥ /
kṛtsna puruṣasyārthaṃ prakāśya buddhau prayacchanti //(*SaK.*

36)

この頃に現われる pK の gerund 形は一応「照らして」と訳しておいたが、この pK の語が artha と結合することから、その意趣は「照らして」というよりは、「あきらかにして」という意味概念を持っていると考えなければならぬであろう。

次に、紙数に限りがあるため、インド諸哲学派の聖典における pK の用例をこれ以上詳しく論ずることはできないが、『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavad-Gītā BhG) では非常に興味深い pK の用例を認めることができるので、以下に若干の考察を行いたいと思う。

BhG はヴェーダーンタ学派で言うところのいわゆる三つの体系 (Prasthānatraya) の中の一つに数えられているが、これは当然ヴェーダーンタの学匠によって著わされたものではなく、『マハーバーラタ』の一節を飾る叙事詩に他ならない。また、BhG はその名が示すように、本来ヴィシュヌ神をバーガヴァタの尊称によって信奉する宗徒である、バーガヴァタ派の聖典として作られたものである。そして、この BhG はヴェーダーンタ学派との接触のみならず、すべてのインド諸哲学派との交渉が予定され、その中にあっても、上に見たヨーガとサーンキヤ学派との関係は特に密接である。

BhG では、pK の用例は二箇所止まっているが、その内容は次のようである。⁽¹⁵⁾

「善性」は、「動性」と「暗性」とを圧倒するとき増上す、バラタの後裔よ。

「動性」は、実に「善性」と「暗性」とを〔圧倒するとき増上す。〕また、「暗性」は、「善性」と「動性」とを〔圧倒するとき増上す〕

rajas-tamaścābhibhūya sattvaṃ bhavati bhārata /

rajaḥ sattvaṃ tamaścaiva tamaḥ sattvaṃ rajas tathā //(*BhG.* 14-10)

この肉体の一切の門戸（感官）において、光明〈prakāśa〉すなわち知識が生ずるとき、そのとき、「善性」は増上せりと知るべし。

sarva-dvāreṣu deha 'smin prakāśa upajāyate /

jñānaṃ yadā tadā vidyād vivṛddhaṃ sattvaṃ ityuta //(*BhG.* 14-11)

光明〈prakāśa〉（知識）と活動と迷妄とを、それが現前せる時に憎まず、それが止せるときに求めず、パンドウの子よ。

prakāśaṃ pravṛttiṃ camoḥam eva ca pāṇḍava /

na dveṣṭi sampravṛtāni na nivtṛāni kāṅkṣati //(*BhG.* 14-22)

上の14-10などは、まさにサーンキヤ哲学の背景を彷彿とさせるものがあるが、問題は14-11と14-22における pK の語義についてである。

辻直四郎【1980：226】は pK と知識（jñāna）とを同義に解し、上村勝彦【1992：114】は「知識としての光明」と訳し、pK と知識とを同格に捉えている。確かに、先に見た *Sak.* 13 をめぐって *Gabh* では、pK を知識の同義語と見ていた。ところが、上の文脈をどう理解するかの問題は残るが、シャンカラの註 (*BhG.* text, p. 418) では〈yadā prakāśo jñānākhyāḥ upajāyate, tadā jñāna-prakāśena liṅgena vidyāt vivṛddhaṃ udbhūtaṃ sattvaṃ iti〉となっており、問題はここでの jñāna-ākhyā (= prakāśa) をどう解釈するかである。

つまり、ākhyā を 'appellation, name' に解すれば、上村勝彦のように「知識という光明」という意味に捉えることができる。そして、ākhyā を 'appearance, aspect' の意味にとれば、prakāśo jñānākhyāḥ は「知識の相（現われ）としての光」と解釈することができ、jñāna-pra=kāśena liṅgena も「知識という光の特相によって（を伴って）」と理解することができる

であろう。つまり、簡言すれば、pKは「jñānaの外的顕現」の相と見なし得るのである。

§3 pKと結合する語

§1ではpKの目的語がdhamma (dharma)である一例を示したが、初期仏教聖典ではその成立が古層と見なされているものはほとんどpKとdhamma (dharma)との結合用例しか認められず、後代に成立したと目されている『プッガラパンニャッティ』(*Puggalapaññatti*) p.57, PTS)では次のように、pKとbrahmācariya (brahmācaryā)とが結合している。⁽¹⁶⁾

彼は、初めよく、中よく、終わりよく、教えを示し、有意義で完全に満足し得る、完全に清らかなブラマチャリヤを顕らかにさせた。

so dhammaṃ deseti âdi kalyâṇaṃ majjhe kalyâṇaṃ pariyosâne
kalyâṇaṃ sâtthaṃ
savyañjanaṃ, kevalaparipuṇṇaṃ parisuddhaṃ brahmācariyaṃ
pakāseti.

このフレーズは興味深いことに、譬喩文学のジャンルに属する『ディヴァヴァダーナ』(*Divyāvadāna*)に以下のように同様のものが存在する。⁽¹⁷⁾

sa dhammaṃ deśayati âdau kalyâṇaṃ madhye kalyâṇaṃ
pariyavasâne kalyâṇaṃ svarthaṃ suvyañjanaṃ kevalaṃ paripuṇṇaṃ
parisuddhaṃ paryavadâtaṃ brahmācariya saṃprakāśayati sma /

このように、paryavadâtaが付加されていることに加え、pKにsaṃ(主に総体と結合を意味する前接辞)が付されていることに留意しておく必要があるが、『ウダーナヴァルガ』(*Udānavarga*)では、次のようにpKの目的語がmārgaである用例を認めることができる。⁽¹⁸⁾

究極の成就のため、清らとなるために自制し、
輪廻の生と死を滅し尽くし、
数え切れない境界に悉く向って行き、
まさに、この道が世界を知る者（釈尊）によって顕かにされた。

atyantaniṣṭhāya damāya śuddhaye

saṃsārajātīmaraṇakṣayāya

anekadhātupratisaṃvidhāya

mārgo hi ayam hy lokavidā prakāṣtaḥ

このように、pK と mārga とが結合しているが、この mārga はブラフマチャリヤすなわち八正道を指示していることは明らかと言える。ちなみに、チベット訳では so sor rtogs pa で、これは prati-√ikṣ (or √khyā) に相当し、蔵訳者は pK に特別な認識を持っていない。

以上は、初期仏教の経典類を中心に pK と dhamma (dhrama)・brahmacariya・mārga と結びつく用例を見て来たが、大乘に入ると、特に『法華経』では次のような非常に興味深い用例を見出すことができる。⁽¹⁹⁾

そして、彼（釈尊）はその後瞑想より立ち起がって、その最も勝れた光を放つ菩薩に託して、『サツダルマプンダリーカ』という、真理の異名を、広く（遍く）顕らかにした。

sa ca bhagavāṃs-tataḥ samādher-utthāya taṃ vara-prabhaṃ bodhi-sattvām ārabhya **saddharmapuṇḍarīkaṃ** nāma dharmaparyāyaṃ **saṃprakāśyāmāsa/**

このように、『法華経』では、pK と saddharmapuṇḍarīka とが結合しているのである。

すると、このことから見ても、「語る」「説く」「告げる」行為は一般的に√dis や√khyā や√vac が用いられるにもかかわらず、pK だけが特別な機

能と役割を持っていると考えざるを得ないのである。そして、初期仏教聖典では前接辞 *saṃ* が結合している用例を見出すことができないが、大乘ではこの『法華経』でも『般若経』（pK と *prajñāpāramiā* と結合）でも前接辞が附された形を多く見出すことができる。これは、大乘に入って、開顕された真理が大乘教団のそれぞれの釈尊に代わる法師 (*dharmabhāṅaka*) たちが、世間により広く顕らかにしたことを強調しようとした意図が働いていたとしか考えざるを得ない。

ところが、『ランカーアヴァターラストラ』（*Laṅkāvatāraūtra*, ed. by Buyiu Nanjio, p. 4）でも、pK の用例を幾つか見出すことができるが、pK に *saṃ* という前接辞は次のように附されることはない。

ここにやって来た私は、十首を持つラクシャスの王である。

私のランカーと、その城に住む者を護りたまえ！

実に、過去の正覚者たちによっても、各々の自内証の境界が、山頂にある宝をちりばめた城の中で、顕らかにされた。

rāvaṇo' haṃ daśa-grīvo rākṣasendra ihāgataḥ /

anu-grhṇāhi me laṅkāṃ ye cāsmiṃ pura-vāsinaḥ //7

pūrvair api hi saṃbuddhaiḥ praty-ātma-gati-gocaram /

śikkhare ratna-khacite pura-madhye prakāśitam //8

このように、正覚者たちの各々の自内証の境界 (*praty-ātma-gati-gocara*) が pK の目的語になっているのである。ただ、大乘の諸経典において、pK の目的語がそれぞれの経典の主張によって異なっているとは言え、それぞれの経典が第一義とするものを pK という動詞を用いて顕らかにしようとしていることは明らかであり、*saddharmapuṇḍarika* も *prajñāpāramitā* も *pratyātmagatigocara* も、結局は真理としての *dharma* に帰着せしめようとした大乘教徒の意図を窺い知ることができるであろう。

結 語

最後に、§1で見た『スッタニパータ』の定型フレーズの内容に立ちかえることにする。この定型フレーズは結局、眼を有し灯火をかけた積尊が、聴聞者に対して教えを pK することによって、眼を持たず灯火も携えていない聴聞者がまさに「眼から鱗」の如く、今まで見えなかったものがみえ、「めざめさせられる」という、無明から明への転換構造を示しているのである。そして、聴聞者は無明から明へと転換させてくれた積尊に敬意を起し、その機縁によって積尊の正式な弟子（=比丘）となり、積尊によって示された実践道（八正道）を怠ることなく努め励むことによって、やがては自ずと悟りへの智慧が生じ阿羅漢となる、という構造を呈していると言える。

聴聞者が「眼から鱗」のように覚醒される場面で、特別に pK という動詞が用いられるのは、pK が本来「強く（前に）輝く」という語義を持っていることから、pK はただ単に「話す」とか「告げる」とかいう発言作用ではなく、日常性を超えた「ことばの発現」を担っている動詞と考えることができる。つまり、積尊から発せられることばは、常に「光輝いている」からこそ、聴聞者をして覚醒させることができると言っても過言ではないであろう。

§2では、バラモン教内部の聖典によって pK の意味概念を探查する作業を行ったが、ヴェーダ聖典やウパニシャッド文献に見出される pK は基本的に「光照作用」を担っていた。ところが、YSにおける pK は「自身の pK を覆っている āvaraṇa を取り去ることによってブッデイが発露する」という具合に、その意味概念は物理的な光照作用からは遠ざかっている。また、SaK では pK はサットヴァの特性であり光照作用の意味概念を離れ、

「プルシャの目的をあきらかにして知覚の中に引き渡す」役割を担っていることが分かった。そして、*BhG*に至ると、pK は jñāna と同義に扱われ、jñāna の外的顕現の相と見なし得るという結論を導き出すことができた。

すると、仏教とインド諸哲学派との間にいかなる交渉や出入りがあったかどうかについて論ずるだけの文献学的跡づけを行う上での証左資料を持たないことに加え、その時間的余裕も持たないために、明確なことは言えない。しかし、経典を作成した仏教徒たちは、バラモン教内部において pK が基本的に物理的かつ神秘的光照作用の意味概念を持つ語であることを知っていたことは確かであろう。

そして、バラモン教内部ではほとんどが名詞形の pK として登場することは先に見た通りであるが、これに対し仏教側の経典等において pK はほとんどが動詞形として登場し、名詞形の pK は皆無に等しいと言っても過言ではない。

これは、仏教徒たちは pK が基本的に光照作用を有する語と知っていて、経典作成の段階で pK を取えて動詞形に変換し、それを仏教における教義語の如く「説法」の場面に登場させたと考えることはできないだろうか。

ちなみに、仏教典籍において、pK と prati-√bhā (pBh) が対で登場することはないが、先に見た『スッタニパータ』における釈尊の説法によってめざめて行く聴聞者たるパーラドヴァージャの様子からは、まさに pBh という状態が予定されていると言っても過言ではない。

つまり、説法者たる釈尊の pK と聴聞者の prati-√bhā の相関関係が成立した瞬間に、聴聞者に発露するのが何かと言うと、それが dhammacakkhu (法眼：真理への眼)なのである。法眼の生起は、釈尊の智慧を本源として発せられる「ことば」(vacana) によってはじめて可能であり、その釈尊の「ことば」を聴聞者に到通させる役割を担っているのが、pK で

あると言い得るであろう。そして、釈尊の「ことば」は究極の智慧を本源としているが故に、ある意味での神秘的「輝き」に満ちていたであろうことは確かであり、聴聞者は釈尊のその〈輝きを有することば〉を聞いて、眼から鱗の状態となり、ここに法眼の生起が確定し、かくして聴聞者は釈尊の弟子となるのである。

この法眼をめぐる問題に関連して、Peter Masfield は、²⁰⁾ dhammacakkhu の獲得が四諦の解悟を意味すると規程しつつも、その境界が闇の中の形相が光輝く閃光を通して顕わになることに他ならず、このような考え方はウパニシャッドの梵我一如の思想を再構築したものにすぎないという主張に至っているが、仏教の「めざめ」はそうではない。

仏教の「めざめ」は、あくまでも〈無明：avidyā〉から〈明：vidyā〉への転換構造であり、そこに Masfield が主張する「闇の中の形相が光輝く閃光を通して顕わになる」というような、キリスト教的「光」の観念を見出すことはできない。

仏教は、〈無明→明〉への「究極の智慧の完成」(prajñāpāramitā) がすべてであり、その最終点が āloka (光明ではなく、遍くみる) という意味での sarvajñānātā (一切知智性) へと繋がって行くと理解すべきなのである。

この意味でも、「智慧光明」という漢語があるように、「ありとあらゆることを手にとるようにつぶさにみえる」ことが「めざめ=覚り」であり、光の現成生的境界が「めざめ」の即身的体験でも何でもないという認識を深めるべきではないだろうか。

註

(1) *MBh.* 12-288-39, 荒巻典俊「Suttanipāta 1032-1033: Ajitamāṇavapu-
— 18 — 説法による弟子のめざめの構造 (前谷 彰)

ccha について」『日本仏教学会年報』第41号【1975】p.2, なお, 本稿において重要語句には筆者によって強調をかけることにする。

- (2) 使用テキスト: Geltner, K. F., *Der Rig-Veda aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt mit einem laufenden Kommentar versehen*, 3. Teile, Cambridge (*Harvard Oriental Series*, ed. by Lanman, vol. 1-3)【1951】なお, ヴェーダ文献の和訳は, 辻直四郎『インド文明の曙』岩波新書【1967】及び『ヴェーダ・アヴェスター』(『世界古典文学全集3』)を使用する。
- (3) *ibid*, Geltner, Teile. 2, 96 ここで, Geltner は *cakṣaṇi* を 'der Ersteller' 「光り輝くもの」と訳し, *Sāyaṇa* の註を引いて, *cakṣaṇiḥ prakāśaḥ* としている。
- (4) Monier (*Sanskrit English Dictionary*, Oxford, p. 381) では $\sqrt{kās} = kṣā$ と見ているから, 最終的に $\sqrt{kās}$ は $\sqrt{kām}$ または $\sqrt{kṣi}$ に関連することになる。また, Macdonell によれば, $\sqrt{kās}$ は \sqrt{kas} としている (Macdonell, A. A., *A Vedic Reader*, Oxford, p. 231) から, $\sqrt{kās}$ の語義を確定することはますます困難となって来るが, 今は $\sqrt{kās}$ の関連語根について深く立ち入ることは止め, $\sqrt{cakṣ}$ が $\sqrt{kās}$ の重字語形という認識に止め置くことにする。
- (5) Pāṇini, II, IV, 54-55 (*The Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*, ed. by Chandra Vasu, 1891, pp. 331-332)
- (6) 翻訳上の問題があるにせよ, 以下の『リグ・ヴェーダ』の讃歌に見出される *cakṣus* などは一義的に決定できない複雑な語義を含んでいる。

cākshur no devāḥ savitā na utā párvataḥ /

cākshur dhātā dadhātu naḥ // (*RV*. 10-158-3)

cākshur no dhehi *cākshushe cākshur* vikhyāi tanūbhyaḥ /

sām cedāṃ ví ca paṣyema // (*RV*. 10-158-4)

上に見られる *cakshus* (*cakṣus*) を Geltner, K. F.【1951】(Teile. 3, 387) は, *RV*. 10-158-4a における *cakṣus* のみを 'Auge' 「眼」と訳し, その他はすべて 'Augenlicht' と訳しているが, この訳語は「視力・視覚」という意味も持つが, *savitṛ* 神との関係からすると, 「眼の輝き」に解すべきであろう。また, 次の讃歌に見られる *cakṣus* などには明らかに

「眼」と「太陽」の二義に解し得る。

citrāṃ devnām úd agād ānikaṃ cākshur mitrāsya vāruṇasyāgnēḥ

/

āprā dyāvāpṛithivī antārikshaṃ sūrya ātmā jāgatas tasthūshaḥ ca
// (RV. 1-115-1)

Geltner, K. F 【1951】 (Teile. 1, 151) は 'das Auge' とのみ訳しているが、辻直四郎 【1967】 (p. 78) では「眼 (太陽)」と訳している。

(7) Chāndogya-Upaniṣad, *The Principal Upaniṣads, ed. With Introduction, Text, Translation and Notes by S. Radhakrishnan, 【1978】*, p. 408

(8) 使用テキスト : Pātañjala-Yogasūtrāṇi, *Ānandāśrama-Saṃskṛta-granthāvalī*, 47

和訳は湯田豊『バラモンの精神界 インド六派哲学の教典』【1992】をそのまま使用させて頂くことにする。

(9) Pātañjala-Yogasūtra-Vivarāṇa, *Madras Oriental Series, 【1952】*, p. 10

(10) 使用テキスト : ① Sāṃkhya-Kārikā, *Chaukambha Sanskrit Series*, No. 296, Work No. 56, Sāṃkhya-Kārikā of Śrīmad Īśvarakṛṣṇa with The Māṭharavṛtti of Māṭharācārya ed. by Sāhitya=ācārya Pt. Vṣṇu Prasad Śarmā, 【1970】

② Sāṃkhya-Kārikā Śrī-Gauḍapāda-Ācārya-Kṛta-Bhāṣya, *Chaukambha Sanskrit Series*, No. 120, 【1968】

(11) 註(10)①テキスト (p. 17) tadā laghūny-aṅgāni, viśddhānīndriyāṇi sva-
viṣaya-grahaṇa-samarthāni bhavanti

(12) 註(10)②テキスト (p. 21)

(13) 註(10)①テキスト (p. 36)

(14) ここにおける prayacchanti (pra-√yam) の訳は、註(8)掲の湯田豊【1992】(p. 208) を依用した。

(15) 使用テキスト : The Bhagavad-Gita-Bhashya, *Complete Works of Sri Sankaracharya*, Vol. IV, 【1982】和訳に関しては、辻直四郎『バガヴァッド・ギーター』インド古典叢書【1980】及び上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫を使用。

- (16) *Puggalapaññatti*, p. 57, PTS
- (17) *Divyâvadâna*, 32. Rûpâvati, ed. by Cowell & Niel, p. 470
- (18) Udânavarga, 12. 14, “*Eine Sammlung Buddhistischer Sprüche in Tibetischer Sprache*, Hermann Beckh, p. 41
- (19) *Saddharmapundarikasûtra*, with N. D. Mironov’s Readings from Central Asian Mss. Ed. by Nalinaksha Dutt, p. 16
- (20) Peter Masefield, *Divine Revelation in Pali Buddhism*, The Sri Lanka Institute Of Traditional Studies, 【1986】 pp. 72-73